

《子どもの回答から》

このワークに含まれているような語想起や連想の課題を行うと、子どもからさまざまな回答や反応があります。それらの中で、多くの子どもに共通する、誤りや難しさについて、考えてみたいと思います。

No.1

課題Ⅵ、Ⅷなどの語想起課題で、「白いもの」などの条件に対して、「スリッパ」や「カーテン」などをあげる子どもがいます。スリッパやカーテンには色の特性がないので、このような回答は誤りですが、このような語を挙げる子どもには、以下のような問題が見られます。

①語の定義づけが不完全

たとえば、スリッパは、「履物」、「屋内で使用」などの普遍的な特徴があります。一方、色や柄にはさまざまなものがあり、それによりスリッパを定義することはできません。その名称で呼ばれるものすべてに共通する特徴を洞察する必要があります。

②語の一般性が理解されていない

「スリッパ」を挙げた子どもに理由を尋ねると、「家で使っているから」という答えがよく返ってきます。私たちは、コミュニケーションの中で、自分だけが持つ情報や経験でことばを定義し、使うことはできません。ことばは、みんなと共有する記号である、という認識が必要です。

③語のプロトタイプ化が進んでいない

プロトタイプとは典型です。たとえば「イヌ」ならば、100人が見てほぼ100人が「あれはイヌだ」と判断できるもの、それがプロトタイプです。イヌの中にも、珍しい姿や色のもものもいるわけですが、特殊例であり、それらの特徴で、イヌと言う語を使うことは、コミュニケーションのルールに反することになります。

*①～③と分けましたが、語の本質を、異なる視点から述べたものです。円滑なコミュニケーションのために、みんなと共有できることばを育てる必要があります。

追加)課題Ⅵの最終問題は、反例発見問題です。「赤くないもの」などの条件に対して、適切な語を挙げるためには、逆に、「白いもの」や「黄色いもの」が明確に定義されていることが必要です。

No.2

同じく語想起課題で、「怖いもの」などの条件に対して、「ネコ」や「アリ」などをあげる子どもがいます。この回答を、どう判断するかは難しいところです。実際に、その子どもにとっては畏怖の対象なわけですから、間違えではありません。しかし、みんなが取り組むプリントや課題という観点からは、やはり未熟さがあります。社会一般で「怖いもの」にはどのようなものがあるか、を問われている意識があれば、「お化け」や「地震」という答えが常識的です。常識とは、自分がいま置かれている状況と、問う人との関係性を考慮した上で、もっとも適切として下した判断です。自分が所属する社会において、最大公約数となる語を挙げられることが大切だと思われま

No.3

連想や想起の課題場面において、頭の中の辞書(心内辞書)には比較的多くの語彙があるのに、その場になると、なかなか出てこないという子どもが多くいます。語の連想・想起は、すでにあることばを検索し、再生する作業であり、その検索力の高さが、持っていることばをコミュニケーションの中で最大限に生かせる基盤となります。音韻であれ、意味であれ、さまざまな条件をかけて、また組み合わせ、ことばを頭の中から探し出すトレーニングをすることが、会話における流暢性を高めることにつながるのではないかと思います。そして検索のための、もっとも大切な導線が、ことばとことばが有機的につながりあったことばのネットワークです。ことばの網の目が、より細かく複雑に張り巡らされていることが、人との関わりの中で、生きたことばを持つことにつながっていくと思います。

☆より詳しい資料として、葛西ことばのテーブルHP内の学習会資料(第11回「自己認識を考える」、第13回「俳句を考える」など)を、ご参照いただければと思います。